

場面 1

ずっと、むかしのことです。ジャックという働き者の少年がおりました。イギリスの農場の小さな家にお母さんと住んでいました。ジャックとお母さんはとても貧乏でした。持っているものといえば、もうミルクも出なくなってしまった年老いた牛だけでした。

ある朝、ジャックのお母さんが言いました。

「ジャック、もう食べるものも全部なくなってしまったよ。どうしよう？」

悲しそうに、ジャックは言いました。

「牛を売ることにしよう。明日の朝、ぼくが市場に連れてゆくよ。」

場面 2

市場は遠いので、あくる朝、ジャックは早起きをしました。ちょうど、お日さまが丘の上から顔をだすところでした。

ジャックと牛は、市場にむかって、でこぼこ道をとぼとぼ歩いていきました。はらぺこで、それ以上、早く歩くことができないのです。ただ、ひたすら歩きました。

すると、とつぜん、奇妙なかっこうをした老人が、ぴょんと飛び出してきました。

「おい、そこの少年よ。」とうなりました。

「その牛と、わたしの魔法の豆をとりかえっこしないかね。」

老人は、ぐっと近寄って、ささやきました。

「ごらん。ほんものの魔法の豆だ。おまえさんを大金持ちにしてくれるよ。」

ゆっくりと、しわだらけの手をひろげました。たしかに、豆は金の小川のように、かがやき、光を放っていました。あまりの美しさに、ジャックは牛を老人に、あげることにしました。

ジャックはうきうきして、家までスキップをして帰りました。お母さんに見せるのが待ち遠しくて。

場面 3

「お母さん、みて！」ジャックは家に向けこむと、大声でいいました。得意になって、光る豆を見せながら、不思議な老人のことを話そうとしました。

でも、お母さんは喜ぶどころか、かんかんに怒りだしました。あんまり怒ったので、まるで熟したトマトのように真っ赤な顔になりました。

「大切な牛をただの豆つぶと、とりかえたんですって？」と叫びました。

「そのじいさんに、だまされたのよ！こんな豆だけで、どうやって生きてゆけるの？もう、ほんとうに食べるものはなんにもないのよ！」

ジャックのおかあさんは泣き始めました。あまりに腹を立てたので、ジャックの手から豆をつかみ、窓から投げ捨ててしまいました。

「お母さん、まって！」ジャックは叫びました。「本当に魔法の豆なんだよ！」

でも、おかあさんは、どしどし音をたてながら、部屋から出て行ってしまいました。

ジャックは悲しく、お腹をすかせたまま、寝ることになりました。

場面 4

翌朝、ジャックが目をさますと、なんだか部屋が暗いのです。いったいどうしたのかと、窓にしてみると、なんと、巨大な豆の木が空高くそびえているではありませんか。

「ワー！何だこれは？」不思議に思いました。好奇心の強いジャックは、さっそく豆の木に登りはじめました。どんどん、どんどん上がっていきます。

ずっと下のほうで、おびえたおかあさんが叫んでいるのが聞こえます。

「ジャック！どこへいくの？おりていらっしやい！」

しかし、ジャックは興奮して、とまることができません。あんまり高くのぼったので、すぐに雲の中へと姿を消してしまいました。

場面 5

ながいこと、昇ったところで、とうとうジャックは、雲の上に出ました。遠くの方に大きなお城が見えました。

ジャックはお城まで、歩いてゆき、重たい戸をどんとどんと、たたいてみました。優しそうな女の人が顔をのぞかせると、中から流れてくる、おいしそうな匂いに、ジャックは鼻をくくん、なりました。大好物の食べ物や、そのほかにも、いい匂いが、一度に、ただよってきます。

ジャックのはらぺこのお腹がグーっとなりました。

「お願いします。何か食べるものをください。」女の人にたのみました。「ぼく、本当にお腹がすいているんです！」

女の方は心配そうな様子です。

「そうしてあげたいのだけど、うちの主人は人食い巨人なのよ。あなたを見つけたら、あっという間に、ひとくちで平らげちゃうわ。すぐに逃げた方がいいわ。」といいました。

でも、ジャックは、たのみつづけました。

「何日もなにも食べてないんです！お願いだから、食べるものをください。」

場面 6

女の人ジャックが可哀想になり、とうとう城のなかに招き入れました。
ほっぺたが落ちそうな温かいスープ、ローストチキン、ほかほかのパンにバター、クリームがたっぷりはいったプリン、大好物のくだもの。ジャックは想像できないくらい、たくさん食べました。

突然、お城ぜんたいが、はげしくゆれて、お皿がテーブルからおっこちました。

「主人だわ！早く、かまどにかくれて。」

ジャックはかまどに飛び込み、息をこらしました。

場面 7

ぴたっと、揺れが止まりました。あまりに静かになったので、窓の外の風の音が聞こえました。でも、それが風ではないことに気が付きました。巨人が鼻をくんくん鳴らす音でした。

「フィー、ファイ、フォー、ファム！」おそろしげな大声がとどろきました。

「イギリス人の男の血の匂いがするぞ！」

「まあ、何を言ってらっしゃるの。」巨人の奥さんが言いました。

「あなたのひげに残ってる食べかすの匂いでしょう。たまには、ひげも洗ってくださればいいのに…」

巨人が、どすんとテーブルに座りました。

「だまれ！」と叫びます。「昼めしをもってこい！」

いい匂いの料理を次から次へ運んでくる女の人の、びくびくした足音がジャックにも聞こえました。好奇心のつよい、ジャックは、かまどから顔をのぞかせました。巨人がチキンまるごと二羽と、ジャガイモの大盛り、ワインを三本、チョコレートケーキをまるごと平らげるのが見えました。

場面 8

テーブルの上にあったものを全部飲み込むと、巨人は大声でどなりました。

「魔法のハーブとニワトリをもってこい！」

かわいそうな奥さんが、走ってとりにゆきました。

それから、巨人はハーブに命令しました。

「なにか弾け。」

ジャックがびっくりしたことには、ハーブがひとりで音楽を弾きはじめたのです。

そして、悲しく、すきとおった声で歌いだしました。

その歌は、勇敢な男と、強い女の歌でした。

海に消えてしまった高い船、涙のようにはらはらと金色の木の葉に落ちる暖かい雨。

音楽がゆっくりとお城のなかを流れ、ジャックはかわいそうなお母さんのことを思いました。

すると、巨人がゲンコツでテーブルをたたき、ニワトリに言いました。

「金の卵を産め。」

恐怖におののいた鳥は、次から次へと金の卵を産みはじめました。

ジャックは自分の目が信じられませんでした。

「あのかわいそうなニワトリをお母さんのところに連れてかえってやろう。」と思いました。

場面 9

まんぷくで美しい音楽を聴きながら、巨人はすぐに居眠りをはじめました。そのいびきといたら、まるで巨大な石がこすりあっているような音です。あまりに大きな音なので、なべやフライパンまでがガタガタ鳴りました。

静かに、ぬきあし、さしあしで、ジャックはテーブルのところに行きました。ニワトリを抱き上げ、やさしくシャツの中に押し込みました。ジャックが行こうとすると、ハーブが静かに声を上げました。

「私も、連れて行って！」

ジャックがもうすぐ部屋から抜け出すところで、巨人は自分のいびきがあまりに大きかったのでその音で目を覚ましました。小さな少年がハーブとニワトリを持って逃げようとするのをみて、巨人はひどく怒りました。

「さて、小さな泥棒め！」と叫びました。「ずうずうしくも、オレ様の宝物を盗もうとは！」巨人が重そうにようやく立ち上がるすきに、ジャックは出口に向かって、突進しました。

場面10

ジャックはドアを走り出て、豆の木に飛び乗りました。できるだけ早く、降りてゆきました。その直後に巨人がジャックを追いかけて、豆の木に飛びつきました。木が折れそうなほど、ぐらぐらと揺れました。

巨人の手足は長いので、ジャックにどんどん近づいてきました。恐ろしい叫び声を上げて、巨人は大きな毛むくじゃらの手を伸ばし、少年をつかもうとしました。

突然、ニワトリが巨人の指に噛み付きました！巨人はビックリして、後ろにのけぞり、すんでのところでジャックは逃れることができました。

巨人は、一日中食べたり飲んだり昼寝したりと、だらしない生活をしてきたので、すぐに疲れて動きが遅くなってきました。

場面11

ジャックは、いっそう早く豆の木をすべりおり、とうとう地上に着きました。家に向けこむと、お母さんが、いなくなってしまった息子を思って泣いているところでした。

「お母さん。帰ってきたよ！オノをちょうだい！」ジャックは大声で叫びました。オノで、豆の木をできる限り早く、打ちはじめました。

バン！ バン！ バン！

豆の木は、巨人のすごい重さで揺れています。突然、木が折れて、巨人は下へ下へと落ち、地面に衝突しました。国じゅうがこの世の終わりかと思うほど、揺れました。そして、巨人は地面に衝突して、あまりに深く沈みこんだので、二度と出てくることはできませんでした。

場面12

ジャックが、魔法のハーブとニワトリを見せると、お母さんはびっくりして言いました。
「ジャック！これは、あなたのお父さんの宝物だったのよ。あの悪い巨人が盗んだの。お父さんもあなたが取り戻してくれたのを、きっと誇りに思うでしょう。」

その日から、ハーブは家のなかを美しい音楽で、もちろん今度は楽しい音楽で、満たしてくれるようになりました。そしてニワトリは金の卵をたくさん産んでくれました。二人は大変お金持ちになりました。でも、自分たちが貧しく、お腹をすかせていたことを決して忘れることなく、困っている人たちにも、分けてあげました。

そして、いつまでも幸せに暮らしましたとさ。

おしまい。